令和４年（2022年）１１月１１日（金）

終始業式あいさつ

皆さん、こんにちは。校長の石川です。１、２年生は２学期の期末テスト、お疲れさまでした。テスト直前にコロナの感染拡大があり、高熱で苦しんだり、自宅でオンライン授業になってしまった人も少なくなかったのではないかと思います。これから当日受験できなかったので追試という人もいるとは思います。相変わらずいろいろと思うようにならない中ですが、皆さんには何とかコロナに負けず頑張ってほしいと思います。３年生は実力テストも終わり、１１月末には最後の定期テストを迎えることになります。繰り返しですが、感染症対策と体調管理はよろしくお願いしますね。

さて、今日は深志高校のことを知っているようで知らなかたんじゃあないかという事柄を、３年生が卒業する前に、全校の皆さんにもお話ししたいと思います。

先日広島県の教育長をはじめとした教育委員会の方々と、広島国泰寺高校の校長先生と先生方が本校を訪問されました。深志の自治と自由について話を聞きたいとのことでしたので、私や教頭先生、係の先生方で説明や予想質問に対するＱ＆Ａを準備しました。広島国泰寺高校と言えば、来月、広島に研修旅行に行く２年生が現在交流を進めている学校の一つでもありますので、少しでも良い印象を持ってもらって、２年生のお役に立ちたいとも思っていました。２年生の皆さんは充実した研修旅行としてくださいね。

広島の皆さんとの意見交換の会場は、校長室だったのですが、その準備の途中、ふと平川教育長が見上げた先に鎮座している扁額について聞かれたらどうしようかという不安がわいてきました。生徒の時から通算するとこの学校にいるのも13年目となるのに、全く知りません。興味関心がないということは恐ろしいことです。しかし「細かいことが気になりだすと放っておけなくなるのが私の悪い癖」。そこで、図書館の蒲生先生と国語科のモモジ先生にお手伝いいただきながら、内容や由来について調査をしました。まさに一夜漬けですね。結局広島の皆さんからは、このことについては何も聞かれなかったのですが、これをきっかけにして、校内にある扁額について気になり始めて調べてみたら、いろいろなことがわかってきましたので、そのことをお話してみたいと思います。さて、校長室にある扁額は、この写真なのですが、読めますか？隣の人と相談してみましょう。答えですが、ここには「百年樹人」と書いてあります。２文字目が季節の「季」のように読めますよね。正確には季節の季の字の「子」が干すという字になっているのですが、これで年と読むそうです。台湾の書家である「リ・クウモ」という方の揮毫だそうで、創立百周年の折に、この書を当時お

持ちだった和合元松本市長様が寄贈してくださり、それ以降校長室に掲げられているそうです。それでは「百年樹人」とはどのような意味なのでしょうか。中国春秋時代の書物「管子」の中に出てくる言葉で、「一度植えて一度収穫のあるのが穀物、十度収穫が上がるのは樹木である。一度植え育てて、百年にわたり収穫をもたらすのが人である。」人を育てるというのは一朝一夕にできるものではなく難しいけれど、天下のためには百年の益を産む最も大切なものであり、長期的な視野に立たねばならない、という内容です。相手のことをじっくり待ちながら、成長を支援するというのは、本当に難しいけれど、大切なことなんだと改めて知らされる思いがしました。今後、生徒の皆さんも人に物事を教えたり、育てたりする側に立つことがあるかもしれません。その時に、この言葉を思い出してみてはいかがでしょうか。

さて、皆さんが校内で最も目にしている扁額は、きっと講堂にある「起居有禮　有也」なのではないでしょうか。文字通り、起居に礼あり。松本中学初代校長小林有也先生の大切な教えが、有也先生の揮毫により作成されたもの、と誰もが信じていたと思います。ところで相棒の第８シリーズの中で、悪だくみをする政治家の執務室にこの「起居有禮」という額が飾ってあったことが深志卒業生の中で以前話題になったこともありました。きっと相棒の制作者の中に深志の卒業生がいるのだろうと。それはさておき、確かに有也先生は生徒のあいさつに対しては生徒より深く頭を下げて返礼したということが言い伝えられていますので、有也先生の教育方針の一つであったことは間違いないようなのですが、有也先生がこの４文字熟語を揮毫したのではない、と、本校でかつて国語を担当されていた小林俊樹先生（生徒たちは愛着も込めてコバシュンと呼んでいましたが）は論じています。

この額は、昭和24年に小林有也校長の35回忌にあたって岡田甫校長先生らにより制作され講堂に掲揚されたものであると言うことですが、そもそも「有禮」と「起居」は別々の熟語で、故事成語、４文字熟語の中に、「起居有禮」という言葉はないのだそうです。従って、これは有也先生の思いを、岡田校長をはじめ戦後間もない教師陣が自分たちの思いと同化させて深志生に伝えようとしたものであるとコバシュンは結論付けています。さて、揮毫を残さないと言われる有也先生ですが、ではこの字は誰のものなのか。校長室に小林有也先生の直筆書簡が飾られていますが、この書簡の中にこの４文字が存在しています。この文字をトレースして作成したことは、この額を制作した彫刻家の証言で明らかになっているそうです。当時の教師陣が人間尊重の精神、相手の尊厳・人権を最大限慈しんでほしいという願いをこのような形で伝えようとしたのだと理解できますが、その思いの強さに驚愕するばかりです。

さて、話しは変わりますが、次のスライドの２枚の絵画を見たことはありますか。

どこかで見たことがあると思います。どこにあるか探してみてください。さらにこの絵には作者の「深志に託する夢」が表されているそうです。回答はありません。皆さんに想像していただきたいと思います。ちなみにこれらの絵が掲げられたのは、起居有禮の額が掲げられたのと同じ、昭和24年だそうです。

これで最後です。校長室に掲げられている一句です。「揚雲雀　母校はいまも　山を背に」、「揚雲雀」って、春の季語です。けっして雲雀をフライにしたわけではありませんよ。この春、私は不安の中で校長室に勤め始めましたが、初めてこの句を目にしたとき、本当に元気が湧いてきました。春の青空に上昇気流に乗ってどこまでも上がっていく雲雀と、その先に見える雄大な山岳と重厚な母校、そんな光景が目に浮かび、まさに青春真っただ中の深志生の皆さんを揚げ雲雀に例えて、先輩たちもみんなエールを送っているよ、後輩たちがんばれよ、先生たちもがんばれがんばれ、という作者の思いが伝わってきました。作者はかつての本校の国語教師で俳人でもある藤岡筑邨先生です。筑邨というのは雅号で、本名を藤岡改造先生とおっしゃいます。次の写真は百年史にも載っているもので、昭和40年代、筑邨が学校犬のクロと一緒に授業を行っている写真です。私は１年生の時、筑邨に古典を教わり、深志の歴史と応援歌に出てくる中国の故事成語についてだけはとても詳しくなりました。板書の字は個性的で、理解するのが難しかったのですが、この額の文字は本当に暖かくて、母校愛、後輩愛がにじみ出ていると感じるのは私だけでしょうか。

最後に、今日は終始業式。深志生の皆さんには、一足早いですが、春の季語の「揚雲雀」のように、自分の力を信じて、大空目指して羽ばたく３学期にしていただきたいという願いも込めて、この句をご紹介いたしました。３年生は、ここまでやってきた自分を信じて、今やっていることを信じて、最後まで粘り強く夢に向かって挑戦してほしいと思います。応援しています。

１，２年生は、今の生活を振り返り、これから続く深志高校での生活で何をつかむか、自分の将来の生き方を展望しつつ、外にも目を向けて幅広く興味関心を抱き、学び、時間をうまく使いながら、自らの輝きを引き出してほしいと願っています。

そして、先生方も、お忙しいと思いますが、揚雲雀たちを引き続きどうぞよろしくお願いします。